Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo

広島大学　グローバルインターンシッププログラム

NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム（G.ecboプログラム）
—10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

第18号　Vol.11 No.1

2019年3月

目次:

新時代のG.ecboへ	1
活躍するOB	2-3
インターンシップ アンケート報告	4-5
インターンシップが 就活に与えた影響	6-7
2018年度派遣実績＆ インターンシップ関連の 修士論文・博士論文	8
2018年度派遣学生 帰国レポート	9-11
ヒヤリ・ハット！！ 2018年度活動報告	12

活動予定 2019年度前期 /Spring 2019 G.ecbo Schedule

…

- ◆4月初旬/G.ecbo 募集説明会 Early April/G.ecbo Application Guidance
- ◆4月23日/応募締切 April 23/Application Due
- ◆4月下旬～/選考及び発表 Late April ~/Selection & Notification
- ◆5月下旬/事前研修開始 Late May/Commencement of Pre-internship Training
- ◆8月上旬/インターンシップ開始 Early August/Departure to internship

新時代のG.ecboへ

肥後　靖 教授
G.ecbo プログラム運営委員会 委員長
大学院国際協力研究科 i-ECBO部会 委員

2010年に藤原前委員長からG.ecbo運営委員長を引き継いで丸10年が経過しました。本年度末が委員の改選期であり、来年度は私の定年期でもありますので、これを機に委員長を辞すことに致しました。本プログラムの生みの親である藤原教授から託されて以後、只管教育プログラムとしての育成に心を砕いてきたつもりです。まだまだ、不足な点もあると思いますが、ここまでプログラムを存続できたのは、偏に皆様のご協力の賜物と感謝に堪えません。

広島大学はここ数年で劇的な変革を遂げており、その変革はこれからも続くと思われます。G.ecboプログラムもこのような変化の激しい時代に対応して改革するべきと考えており、柔軟な発想を持った新しい視点を取り入れる時期に来ていると考えます。そこで、老兵は消え去るべきであると思い、前述の決断に至りました。

本プログラムへの思い入れは沢山ありますが、旧来的な執着は老害に繋がりかねないので、新しい時代に即した新しいプログラムを若い方々が、改めて構築して頂ければと思います。再度皆さまのご協力にお礼申し上げますと共に、本プログラムが今後益々発展して、広島大学にG.ecboあり、と内外に認知される教育プログラムになることを祈念しております。

G.ecbo海外インターンシッププログラムとは？

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して，既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出，国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と，世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

活躍するOB

国際協力へ

浅田　義教　Yoshinori ASADA　–JICAラオス事務所
2011年度　グラミン銀行（グラミンシャクティ），　バングラデシュ派遣

ラオス商工業省輸出入局の
パリさん（IDEC金子研の先輩）と。
会議でよくお会いします

2017年3月からJICAラオス事務所にてガバナンス分野の企画調査員として勤務しています。ガバナンス分野の専門家や実施中の技術協力プロジェクトのサポート、新たな案件の形成が主な業務です。最近ではラオスの財政安定化の取り組みがメインとなっています。

ー インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

マラソン中（目標に向かって自分のペースで走っている、でもまだ15km地点、そんな感じです）

ー G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面 や局面について

G.ecboに応募する時、普段の慣れた日常から飛び出るような感じで、少し不安だったのを覚えています。でもその怖いという不安な気持ちを、わくわくするような前向きな気持ちで捉えることで、インターンシップを通して良い経験を得ることができました。チャレンジの際に感じる不安を、どうすれば楽しめるか工夫し前向きな心持ちに転換する術は、就活、業務中、日常生活の中で生じる様々な場面で大いに役立っています。

ー自分の中に残り根付いていると感じるもの，さらに発展していると感じるもの

G.ecboで行かせていただいたインターンシップ先（バングラデシュのグラミンシャクティという非営利企業）では正直苦しいこともありました。インターンシップでの活動について何をどのようにするのか先方からは何も指定されなかったので、自由な反面、自分でしっかり計画を立て、コミュニケーションを自分から取り、提案し、実施していかないと、取り残されていくような感覚がありました。IDEC卒業後の就職先では組織から与えられる仕事をこなすケースが多いですが、自分から何かを仕掛けていく、提案していく姿勢の大切さをインターンシップ中に学び、今でも実践しようとしています。

ー後輩へのアドバイス

不安な気持ちや緊張感、そんなのもひっくるめて楽しみながら是非いろいろチャレンジされてください！あたって砕けることありますが、全力トライの失敗も胸を張れる素晴らしいものだと思います。

財政安定化についての議論の様子
ラオス国立経済研究所ペキョさん（IDEC金子研の先輩）が
仕事上のカウンターパートです

JICAラオス事務所の受付業務 の様子

活躍するOB

地方行政へ

田中　健太　Kenta TANAKA　－東京都庁（水道局所属 ）
2011年度　国際協力機構（JICA）　マカッサル・フィールドオフィス，
インドネシア派遣

2011年JICAマカッサル・フィールドオフィスでの
インターンシップ中（調査中の写真）

私はIDECを修了後、東京都庁へ入都してから7年間水道局に所属しています。現在は、2020東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、大会期間中の水道水の安定給水や、災害時に備えた水道管路の更新事業に携わっています。

ー インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

この質問で思い浮かんだ言葉は「脱皮」です。

近頃良い意味で、自由に考え・行動している自分に気がつくことがあります。G.ecboで新たな自分を発見できたことがきっかけのひとつだったと思います。成虫への道のりはまだまだですが…笑

ー G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面 や局面について

G.ecboでは、インドネシアに滞在し、現地特有の交通手段のパラトランジット(オートリキシャや乗合タクシーなど)について、運行や営業実態の調査をしました。より生の声を聞きたくて、現地で通訳をしてくれる方を紹介してもらい、毎日町中を巡り、運転手の方や町ゆく人にインタビューしました。調査を進めていくうちに、将来モノレールが走る、と聞き「現在の交通機関は廃れてしまうのか、行政側の考えも聞いてみたい」と何気なく話すと、行政トップクラスの方（交通局長？）からお話しを聞ける機会もいただくことができました。あまり先が見えないままスタートしたインターンでしたが、ただ一生懸命打ち込むうちに、気がついたら協力してくれる・助けてくれる輪が周りにできていたように思います。

社会人になり7年が経ちますが、未だに新しいことや問題に直面する毎日です。そんなときでも、G.ecboを通して感じ学んだ「一生懸命になれば周囲がついてきてくれる」経験を糧に、労を惜しまず行動することを心がけています。

現在の仕事では、日常業務で世界と関わることはほとんどありませんが、東京都水道局の安全性や技術は世界トップクラスであり、安全な水を飲めない国への技術支援にも取り組んでいます。私も将来、国際事業に携わることを視野に入れ、まずは専門知識や技術の習得のために日々励んでいます。

ー自分の中に残り根付いていると感じるもの，さらに発展していると感じるもの

「まずやってみる」ことです。以前は理屈が先行して行動できないことが多々ありました。G.ecboに挑戦できたことをきっかけに、躊躇することが少なくなり、今では鉄のハートと言われています。

ー後輩へのアドバイス

少しでも興味を感じたら、「まずはやってみる」。

新設する水道管を入れるための
トンネル内を現場点検中

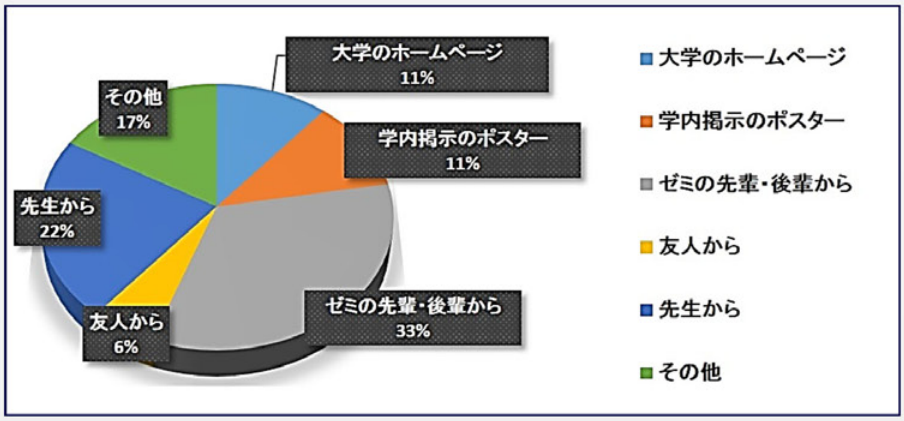
給水所現場点検の様子

居酒屋で意気投合。隣に座っていた
ドイツ出身の人と一緒に晩酌をしました

インターンシップアンケート報告 （2017年・2018年度派遣学生アンケート）

G.ecboプログラムでは、活動の評価並びに今後のプログラムの内容充実を主な目的とし、受入機関・指導教員・派遣学生を対象にプログラム評価アンケートを実施しています。アンケート結果を一部ご紹介します。

Q1) G.ecboプログラムを知ったきっかけは？



Q2) G.ecboへの応募の一番の決め手は？

- 自分の興味や研究に合わせて、研修先での予定を決定できる点。
- 受け入れ団体と自分の研究との合致性。
- 海外で研究を行うことができること。
- 海外経験、海外インターンシップ経験。
- NGOの活動について具体的に知ることができると思ったこと。
- 英語練習。
- Expand my horizon and interested in TA training.
- 旅費等を負担していただけるため，経済的な負担が軽くなること。

Q3）参加するに当たって期待していたことは？

- 海外に長期滞在することで自分の実力の現在地を確認する。
- 実務体験、文化理解、英語能力向上、日本ではできない経験。
- To get a better outlook for my research.
- 将来NGOで働きたいと考えているので、途上国NGOはどのように運営をしているのか学ぶこと。
- Practical knowledge, job experience, field experience.
- 研究先との連携、渡航費の補助。
- Experiences for future plan.

Q4）インターンシップ遂行上不足していると痛感した能力は？

- 語学能力や積極性。
- 英語でのコミュニケーションや業務に支障はなかったが、現地スタッフとのコミュニケーションはヒンディー語やベンガル語が必要で、事前にもっと勉強しておけば良かったと思った。
- 環境への柔軟性。

Q5) 参加のメリット・デメリットは？

≪メリット≫

—*Preparatory trainings*

- 最大のメリットは、自身の渡航計画を（事前研修を通して）多くの人にみてもらう機会があること。
- G.ecbo主催のプレゼンテーション研修は、厳しい雰囲気の中、自分の専攻とは違う先生方からのアドバイスをもらえたことは本当に貴重な時間だった。インターンシップの計画をより進めることが出来た。
- I learned a lot from the program. Through the English presentation, I practice a lot and have a better understanding to control my presentation flows. And teachers gave me a lot suggestions in revising PPT,CV and cover letter.

—*Experiences*

- 将来のキャリアや研究活動を考えるうえで、M1の夏という早い時期からフィールドで活動できたことは最大のメリット。
- 個人で手配はできないような経験ができた。途上国経験、約1か月もの間、外国に生活すること。
- 辛いことも沢山あったが、自分の進路のためにも貴重な体験ができた。
- Improve interpersonal skills, and others.

—*Others*

- 学校を通した信頼のあるインターンシップであった。
- 金銭面の支援があり海外で十分に研究に集中できたこと。
- 現地の実情を体感し、我々がすべきことを考える機会となったこと。
- ディスカッションなど複数の人が集う中で、物おじせず自分の意見を主張できるようになった。
- 世界には様々な価値観があるということ、異文化のすばらしさを学んだこと。異国でたくさんの友人ができたこと。
- 入学当初は英語でコミュニケーションをとることに抵抗があったが、帰国後は「英語がうまくなったね」と周りの学生から褒められるほど留学生たちと自然に会話ができるようになったこと。

≪デメリット≫

- 就職活動に向けて他の企業へのインターンシップができなかった。
- インターンの準備に時間がかかること。
- デメリットは特にない。

～指導教員アンケートより～

- 現地ならではの化学反応があった。それがメリットである。デメリットはどうとらえるかにもよるが、特にないのではないか。
- G.ecboに沿ってプレゼンを重ね、現地でやり取りをすることで、学生の研究内容がより絞られた。
- 通常の講義履修や研究活動では得られない実践的な経験の機会となった。
- 学生時代に貴重な経験を得ることができ、学生の将来にプラスとなる機会である。

インターンシップが就活に与えた影響１

大島　梓（国際協力研究科 教育文化専攻）
株式会社マザーハウス　内定
派遣先：　特定非営利活動法人IMAGINUS，インド（2017年 8月～9月，53日間）

― この企業・業界を選んだ理由

「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という理念のもと、バングラデシュやインド、ネパールなどの開発途上国でアパレル製品を作り、日本や台湾、香港などの直営店で販売している会社です。もともとアパレル業界に興味があったことと、国際協力のアプローチ方法としてのビジネスへの興味から、その中でも先進的なモデルを築いているマザーハウスに就職を決めました。

途上国とのビジネスというと、オフショアとして途上国に拠点を持ったり、貧困層の所得向上を目指したフェアトレードなどのソーシャルビジネスという形を取ったりすることが多いのですが、マザーハウスは途上国にある素材を途上国にいらっしゃる最高の技術を持った職人さんによって製品へと変えることで、オフショアやソーシャルビジネスにありがちな先進国と途上国の上下関係を無くし、対等なビジネス関係を築く一アパレルブランドというモデルを展開しています。

― インターンシップ経験が就職活動に与えた影響

G.ecboインターンシップがきっかけでインドが大好きになり、就職してもインドと密接に関わり続けたいという思いが就職活動当初からあったため、必然的にそれが就職活動の軸にもなりました。様々な業界・企業の会社説明会に足を運びましたが、マザーハウスで働くことをイメージした時がいちばんワクワクし、ここで働きたいと強く感じたのを覚えています。研究内容と近しい企業で働くことで自分の視野を狭めてしまわないか、という不安もありましたが、自分の直感と途上国が好きという気持ちを信じたいと思います。企業選びや働く姿をイメージするときにはインターンシップの経験が役に立ちました。

― インターンシップで一番得たもの

忍耐力と応用力です。インドは気候が暑く熱中症に罹ったり、人柄や政治的条件に左右されて思うように業務や調査が進められなかったりと現地での活動において、自分ではどうしようもない不可抗力に襲われるときが多々ありました。その中で、一度上手くいかなくても再度トライしてみる忍耐力と、この方法でダメなら別の方法を試してみる応用力が身に付きました。

― 後輩へのアドバイス

海外で自分一人でインターンシップを行うということは、一見ハードルが高く難しいことのように思えますが、思い切ってそこへ飛び込んでみると想像もできなかった自分に出会えると思います。私もインドへ行く前日は怖くて泣いていましたし、インターンシップ中も楽しいことばかりではなく、辛いことや大変なことにもたくさん直面しましたが、帰ってきてからは「自分はこれだけのことができるんだ」という自信がつき、どんな環境でも臆せず物事にチャレンジすることができるようになりました。大学院の数年間は長いようであっという間に過ぎてしまいます。どう過ごすかは人それぞれですが、私は自分で考えて試行錯誤して頑張っていくことは、必ず成長の糧になると信じています。G.ecboプログラムは成長の場としてとても良い環境ですので、少しでも興味があればぜひチャレンジしてみてください。

インターンシップが就活に与えた影響２

曽原　葵（文学研究科 日本史学専攻）
教育関係企業　　内定
派遣先：　インドネシア教育大学，インドネシア　（2017年 9月，29日間）

ー調査内容について

インドネシアの大学・高校教育についての調査の一環で、日本の文化・歴史の紹介をしました。教育史を研究しているので、日本の教育に関わる内容の発表をしました。

ー 印象に残っていること

「先生の講義をきいて、日本にますます留学したくなりました。」と学生に言ってもらえたことです。日本のことを知ってもらいたく、たくさん準備をして行った授業だったので伝わってよかったです。この時に声をかけてくれた学生は今日本に留学しています。学生達の日本語に対する学習意識を高めることができ大変嬉しく思いました。

ー インターンシップで一番得たもの

日本語学科の学生の多くは、アニメや漫画といった日本の文化から興味を持ち日本語を学んでいます。日本とインドネシアでは、歩んできた歴史も育んできた文化も全く違います。全く違う両者ですが、その違いを認めることで互いに分かり合える、という、当たり前で、でもとても難しいことに改めて気づくきっかけを得ることができました。
グローバル化が進んでいく社会の中で大事になってくる姿勢をインドネシアの学生達から教えてもらったように思います。

ー この企業・業界を選んだ理由

インターンシップで教育に携わる仕事がしたいと強く思ったからです。大学合格という夢を、生徒の近くで支援できることに魅力を感じました。

ー インターンシップ経験が就職活動に与えた影響

インターンシップ前から事前研修を通して発表する機会が多くあったので、面接で堂々と話すことができました。教育もグローバル化が進んでいるので、この経験は仕事に必ずいかせると思います。

ー 今後の目標

チャレンジ精神を忘れずに、新しい環境でも成長し続けたい。海外の教育事情にもアンテナを張り仕事に取り入れていきたいと考えています。多様な未来を子ども達に示せる社会人になりたいです。

ー 後輩へのアドバイス

G.ecboでのインターン中は、決して楽しいことばかりではありませんでしたが、現地の先生方や何よりも学生達が、私を支えてくれました。今でも連絡をとりあい、日本語指導をすることもありますが、中には日本留学という夢を叶えた学生もいます。夢の支援が出来たことを本当に誇りに思います。この経験が、今の私を形作っていると心からいえます。
私は、英語もインドネシア語も堪能なわけではありません。コミュニケーションがうまくできずにもどかしい思いをしたことも何度もありました。ですが、G.ecboで何かを成したいという強い気持ちがある人には是非応募してほしいと思います。諦めなければきっと道は拓けます。一度しかない学生生活を後悔しないように過ごしてください。

2018年度G.ecboプログラム派遣実績

夏期派遣学生9名，冬期派遣学生7名の計16名を派遣しました。
（※i-ECBO（国際協力研究科専門ECBO）プログラム4名，G.ecbo遡上教育型インターンシッププログラム2名含む）

氏名	所属研究科	参加プログラム	派遣機関
Robb Jae Yong Lee	国際協力研究科	G.ecbo	ブラウィジャヤ大学（インドネシア）
Rasoanjanahary Tantely Nirina	国際協力研究科	G.ecbo	フロリダ州立大学（アメリカ合衆国）
植村　兼三	国際協力研究科	G.ecbo	特定非営利活動法人IMAGINUS（インド）
森脇　宇俊	国際協力研究科	G.ecbo	株式会社アルメックVPI（フィリピン）
梶澤　愛菜	国際協力研究科	G.ecbo	FORWARD Nepal（ネパール）
村上　弥生	国際協力研究科	G.ecbo	メコン大学日本語ビジネス学科（カンボジア）
松山　健悟	先端物質科学研究科	G.ecbo	グリフィス大学量子動力学センター（オーストラリア）
Maharjan Shree Kumar	国際協力研究科	G.ecbo	トリプバン大学ネパール自然史博物館（ネパール）
Mungunzul Badamvaanchig	国際協力研究科	G.ecbo	FORWARD Nepal（ネパール）
孫 瑜	国際協力研究科	G.ecbo	メコン大学日本語ビジネス学科（カンボジア）
角城　竜正	国際協力研究科	i-ECBO	Research Institute for Human Settlements and Housing（インドネシア）
谷本　葵	国際協力研究科	i-ECBO	Research Institute for Human Settlements and Housing（インドネシア）
藤井　真明	国際協力研究科	i-ECBO	Research Institute for Human Settlements and Housing（インドネシア）
Aino Inkeri Li	国際協力研究科	i-ECBO	Finn Church Aid（ミャンマー）
武内　康佳	文学研究科	G.ecbo 遡上	Sina Rang Lemulun Homestay（マレーシア）
Uswatun Hasanah	国際協力研究科	G.ecbo 遡上	マカッサル州立大学（インドネシア）

インターンシップ関連の修士論文・博士論文

今年度，本プログラム参加者11名が，大学院を修了しました（9月修了5名，3月修了6名）。
そのうち7名が，インターンシップの成果のもとに修士論文・博士論文をまとめました。

2018.9修了	国際協力研究科 Mahama Tiah Abdul-Kabiru	A Study on the Linkage between Livelihood and Welfare of Households in Ghana
2018.9修了	国際協力研究科 Soe Ko Ko	A Comparative Study of the Employability of Graduates at Professional Higher Education Institutions in Japan and Myanmar
2018.9修了	国際協力研究科 陳　妍（Chen Yan）	International Comparison on Moral Judgement and Sociality: Case of Autonomous Driving System
2019.3修了	教育学研究科 裵　芝允（Bae Jiyun ）	教育のための「身体感性論の研究」 ー「改良主義」と身体的「実践」に着目してー
2019.3修了	国際協力研究科 Phyu Phyu Zaw	Affectivity, coworker relationship and coworker satisfaction
2019.3修了	教育学研究科 陳　麗蘭（Chen Lilan）	日本の大学における外国人教員に関する研究ー中国人教員に着目しー
2019.3修了	教育学研究科 池野　康太（Kota Ikeno）	高校生の科学的探究活動における研究倫理に関する研究 ー日本と韓国の比較を通してー

2018年度派遣学生帰国レポート

森脇　宇俊　　Takatoshi Moriwaki（国際協力研究科）

Host	アルメックVPI （フィリピン）
Period	2018年 8月 30日－10月 5日
Objectives	メトロマニラにおけるライドシェア（Grab）の利用状況の理解，今後に向けた提案

欧米をはじめとした諸国では一般のドライバーがアプリを通じてタクシーのような移動を提供するライドシェアと呼ばれるサービスが出現している。国内では法律で規制されていることからサービスとしての提供は行われていないが、公共交通機関の維持が難しい中山間地域での運用など、そのポテンシャルが見込まれている。しかし、比較的新しいサービスの形態であるため、これらに対する研究は限られている。そこで本インターンシップでは、ライドシェアが発達しているフィリピンのマニラにおける利用状況の理解、今後に向けた提案を目的とした調査を行った。この調査では、ライドシェアの利用者に意識調査を行った。調査票を設計するうえで様々な問題にも直面したが、アルメック・マニラ事務所の職員の方やフィリピン大学の教授に助言をいただくなど、ご協力いただいた。このインターンシップは初めての経験ばかりで大変なこともあったが、たくさんの収穫を得ることができた。また、この度受け入れていただいた企業は、私が将来就職を希望している業界である建設開発コンサルタントであり、実際のお仕事も間近で見せていただくことができた。このインターンシップを通じてさらに仕事に対する理解を深めることができ、この業界で仕事がしたいという想いがより強くなった。また、語学をはじめとして、私に足りない力がはっきりしたことで、残りの学生生活で取り組むべきことが明確になった。

角城　竜正　　Ryusei Kakujo（国際協力研究科）

Host	Research Institute for Human Settlement and Housing, Ministry of Public Works and housing （インドネシア）
Period	2018年 8月 24日－10月 8日
Objectives	インドネシアのスラム地区再開発事業に関する実務体験（ヒアリング調査，実態調査，研究課題発見）

インドネシアは、堅調な経済成長に伴う所得格差及び地域格差が拡大し、スラムが形成されてきた。そのため、インドネシア政府は、2014年に国家中期開発計画を策定し、その一つとしてスラム縮小を目標に掲げた。本インターンシップでは、バンドン市に位置するインターンシップホスト機関において、スラム縮小活動の一環であるKampung Susun開発事業に関する研修に参加した。Kampung Susunとは、スラム地区の生活水準向上を意図して建設される階層型集合住宅で、低コストであること、土地を緑や憩いの場といった他の用途に有効活用できるという利点がある。Kampung Susun開発事業のスラム地区を訪問し、住民に対してヒアリング調査を実施した結果、現状の課題と事業への賛否を把握できた。また、同スラム地区の再開発中における仮住まいであるRusunawa Rancacili地区を訪問し、実態調査を実施した。これらより、Kampung Susun開発事業の住民合意形成を阻む要因を抽出した。インターンシップ期間を通じて、インドネシアのスラム地区の再開発事業について実務体験を通じて肌で感じること、制約条件の多い中で幅広い視野で研究課題を発見することができた。また、国際協力に対する関心がさらに強くなり、キャリア形成の展望が持てるようになった。ECBOで得た貴重な経験を活かし、自身の専門分野だけにとらわれるのではなく、物事を柔軟に捉え実現性のある解決策の提案を行い、発展途上国の発展に貢献したい。

植村　兼三　　Kenzo Uemura（国際協力研究科）

Host	特定非営利活動法人・IMAGINUSインド事務所 （インド）
Period	2018年 9月 7日－10月 6日
Objectives	ストリートチルドレンの保護を行うNPOでのインターンシップを通し、ストリートチルドレンの現状把握を行う

今回のインターンシップでは、Hostの新事業のための調査及び既存の教育事業の現状把握を行った。新事業の調査では、対象地域で通訳を介しながら人々のニーズ調査を行い、「貧困」といわれる家庭の様子や実際の収入など、具体的な生活の様子を知ることが出来た。また、インタビュアーの方々との関係の築き方や質問の聞き方など、調査手法の面でも様々なことを学んだ。既存の教育事業の調査では、通常業務として出席簿などのデータからストリートチルドレンの出席日数等の把握を行い、さらに、自身の研究調査もさせていただいた。私は「インドのストリートチルドレンのNGO参与に関する要因」について研究を進めている。今回インドに行くまで、ストリートチルドレンの具体的な生活像を描けないでいたため、このインターンシップでは「自分の目で見る」ことを大切にし、毎朝6時半から通常業務が開始されるまでの間、ストリートチルドレンの観察を行った。その甲斐あり、現在では具体的なイメージを持ちながら研究に取り組むことが出来ている。観察を通し子どもたちとのコミュニケーションもスムーズになり、少人数ではあるがインタビューを敢行することが出来た。このインターンシップを通して本当に多くの経験をさせていただき、自身の研究対象者・地域への理解が深まった。その一方で、これから研究を進めていくにあたり自身の課題も見つけることも出来た。この学びをこれからの研究そしてキャリアに活かしたい。

2018年度派遣学生帰国レポート

藤井　真明　　Masaaki FUJII（国際協力研究科）

Host	Research Institute for Human Settlement and Housing, Ministry of Public Works and housing　（インドネシア）
Period	2018年 9月 13日－11月 29日
Objectives	インドネシアの伝統的集落形態であるカンポン住宅地におけるコミュニティの形成要因を分析するための調査

インドネシアの伝統的集落であるカンポン住宅地では、住民間で住宅や家具の製作や修理、地区の保全活動のための集まりなど数多くの相互扶助によって生活が営われている。コミュニティ活動だけでなく、日常的に住民が集まり食事や会話などの活動を見ることができる。そのため、コミュニティ意識が高いといえる。私は実際にカンポン住宅地を訪れ、如何に彼らが良好なコミュニティを形成しているのかを分析するために複数の調査を行った。現地の方々は実測器具の設置の許可やアンケート調査など現地の学生に協力して頂いた。住民の中には英語を全く使えない方々もいたため、コミュニケーション面で苦労したが、常に相手が伝えたいことを理解しようと心がけ、ジェスチャーを交えながらコミュニケーションを取ることで日本人が私一人しかいないという状況の中でも活動できた。事前に準備をしていたが、想定外の状況に遭遇し、計画通りに物事が進まないことが多々あった。その中で、協力してくださる方々と話し合い、どのように調査を進めていくのか、計画を変更していくことが重要であると感じた。先生方や派遣先のスタッフ、現地の学生の皆様のおかげで調査を行うことができ、とても貴重な経験ができた。この経験を活かし、修士論文の研究に励みたい。

谷本　葵　　Aoi TANIMOTO（国際協力研究科）

Host	Research Institute for Human Settlement and Housing, Ministry of Public Works and housing　（インドネシア）
Period	2018年 9月 13日－11月 29日
Objectives	小型の実験住宅の建設、実験住宅を用いた実験

i-ECBOプログラムでは、派遣先の研究機関で現地の研究者の方々と共に、小型の実験住宅の設計・建設に携わり、建設後に実験住宅を使って実験を行った。インドネシアでは急激な経済成長と人口増加に伴って、中高層の集合住宅が増えているが、温熱環境が劣悪で冷房の使用も増大している。そのため、温熱環境を改善し、省エネルギー化を図る必要がある。私はその中で植物による日射遮蔽・通風での温熱環境の改善手法を検討した。インターンシップの前半は実験住宅の建設の監理と実験で使う植物の準備を行い、後半は実験を行った。また、私が所属する研究室と派遣先の研究機関が共同で行っているプロジェクトにも参加した。このプロジェクトでは実大スケールの実験住宅が建設される予定で、その設計に関わった。私は主に断熱材の検討を行った。このようなプロジェクトに参加したことはとても貴重な経験だった。派遣先の機関は政府の研究機関であり、非常に優秀な研究員の方々が集まっている場所だった。その中に身を置き、ともに研究に取り組んだ2カ月半はとても刺激的な経験で、自分の考えや視野を広げることができたように思う。英語能力も2カ月半で大きく向上させることができたと思う。

Rasoanjanahary Tantely Nirina（国際協力研究科）

Host	フロリダ州立大学　（アメリカ合衆国）
Period	2018年 8月 18日－9月 16日
Objectives	Participate in the PIE program to learn about the teaching assistance in FSU

Studying abroad always requires aptitude to cope with different environment than usual which are most often developed through experiences. That was one of the most important know-how I benefitted from the internship I have been participating at the Florida State University through the G.ecbo program. The internship was mainly aiming to take part of the PIE program, the Program for Instructional Excellence which provides a two days intense training for teaching assistants who will be working for the starting semester. Being interested in research in higher education, the internship provided me an utterly distinguishing image of university settings. As a huge university, FSU values the role of TAs in achieving quality education, by the PIE programs, TAs are trained to be able to face all challenges that may occur in classrooms, such as emergencies, teaching diverse population, time management. The PIE program provides an in-depth understanding of what are expected from TAs by putting trainees in a role-play situation, suitable even for novices in the field of teaching. Besides the PIE program, I could have the opportunity to visit the FSU distance education office where I could learn the roles mentors play in ensuring the smooth process of learning for distance learners as like TAs in face-to-face learnings. The internship has not only enhanced my understanding of learning and teaching settings in university but have helped me to grow as a global citizen, able to understand and interact with people from diverse background and environment, that I think is a necessary skill when conducting research in the field of International Development and Cooperation.

2018年度派遣学生帰国レポート

梶澤　愛菜　　Aina Kajisawa（国際協力研究科）

Host	FORWARD （ネパール）
Period	2018年 8月 18日－9月 23日
Objectives	農村地域を対象に活動するNGOの実務を体験しながら、事業運営のプロセスを学ぶ。

FORWARDは首都カトマンズから200km程西にあるチトワン郡に位置するNGOであり、農村地域に暮らす人々の生活向上を目的に様々なプロジェクトを行っている。事業ごとに担当が分かれており、毎週各々の進捗状況を報告する機会があった。小さなミーティングながらも、プロジェクト運営の難しさや人的規模の多さを知る場となった。インターン中、研究のための調査に行く機会にも恵まれた。自分の足で実際に調査することがいかに困難を伴うか身に染みて感じた。途中、同行スタッフの方が別件で聞き取り調査を行っていた。そこは平地から離れた山間部だった。猛暑の中足を運び、地域住民のため調査する様子に鼓舞された。また、地域NGOと住民の関係性を垣間見た瞬間だった。研修期間中は様々なお祭りが催されていた。それらを通じ、文化・習慣についても多くの学びを得ることがきた。1か月以上の滞在で異文化に直接触れたことは自分自身の価値基準に大きく影響したと思う。今回の研修は途上国経験、NGOでのインターンが初めてだった私にとって全てが驚きと発見に満ち溢れていた。このような機会を与えてくださったG.ecboプログラム、指導教員の先生、ならびにお世話になった現地の方々に深く感謝したい。

Robb Jae Yong Lee（国際協力研究科）

Host	ブラウィジャヤ大学 （インドネシア）
Period	2018年 8月 10日－8月 24日
Objectives	1) to understand about multicultural coexistence in Indonesia; 2) to facilitate a lecture, discussion about Global Citizenship Education at Brawijaya University (BU). 3) to learn how short-term study abroad programs contribute to the advancement of global citizenship education(GCE) and global core competencies.

The G.ecbo Internship was a transformational experience. I expanded my cultural understanding, foreign language communication, and respecting other ways of thinking and living. However, going abroad was not just about receiving but for sharing knowledge and our heart with new people. In addition, I helped to facilitate understanding about living in Japan and student life at Hiroshima University. We did fieldwork around Malang and was able to schedule a lecture about GCE and presentation about Hiroshima University. It was the first time that I worked with students from Indonesia. I was nervous about my presentation, but it went very well. The students at BU said they enjoyed our discussion about GCE and what they could together to solve global issues. Later, the students from BU and I organized an improvised community-service activity on our last day of fieldwork. From our GCE discussions about plastics and rubbish in our local towns and villages, we gave back to the community for the hospitality we were shown, and so the BU students organized an improvised rubbish pick-up activity. I bought some trash bags, gloves and asked the town office to lend us some big rubbish bins. We picked-up nine can-loads of rubbish to give thanks to the village for hosting us and to bring some awareness of trash in the environment. It was truly an inspiring moment for me to be apart of. Thank you to all the faculty, students and staff at BU, HU and G.ecbo for making this experience very…transformational.

Aino Inkeri Li（国際協力研究科）

Host	Finn Charch Aid Foundation, Myanmar Office （ミャンマー）
Period	2018年 12月 4日－12月 21日
Objectives	Conduct a field survey on livelihood empowerment project's results as part of an impact evaluation process.

I was responsible for planning, organizing, and monitoring a field survey from start to finish during my internship with Finn Church Aid (FCA). The survey is the main tool for a post-internship analysis of the project effectiveness and reach within the target areas, and hence an important addition to FCA's own focus group discussion based, qualitative monitoring tools. Instead of an intern, that needs to be looked after carefully, I was treated more like an independent, although inexperienced researcher working on their own project. That means I had the freedom to divide my time and work as I best saw fit, but at the same time had to bear full responsibility of being able to successfully bring the project to an end and solve any possible problems with mainly my personal capabilities or work linkages. It was an incredibly enlightening experience, showing the full spectrum of what it is like to run a project within an NGO, and understand the special features of working in a developing country, where you don't understand the language nor culture. I spent my first week preparing, meeting co-workers and team members, and clearing necessary paper work. The second week was spent with my team of 7 people – first in a 2-day training period, where we went through the survey and practiced interviewing each other – and then in the first village conducting the pilot survey. Third, and final week was given to the main survey. All in all, a tough, but invaluable learning experience!

G.ecboヒヤリ・ハット…！

途上国への渡航は，いつも危険と隣り合わせです。天災に人災に状況は様々ですが、適切なリスク管理ができるよう、万全の準備をしてインターンシップに臨みましょう。

☑体調管理　Health care, etc.

✧（インドネシア）　研修期間中は下痢や軟便が続いた。辛いものが好きでよく食べたり、現地の牛乳を毎朝飲んだりしていたが、それらが体に合わなかったからだと思う。日本では問題なく食べられるものも国が違えば成分の違いなどで体に合わないことがあるので注意が必要だった。

☑政治・治安　Government, Security, etc.

✧（カンボジア）　現地のレストランでレストランのスタッフに財布を盗まれた。防犯カメラ映像のチェックを要求したもののレストラン側に拒否されたが、翌日、レストラン側から連絡があり財布を取り戻した。

✧（ネパール）　首都カトマンズから農村部へバスで4時間ほどかけ移動中、うたた寝をしている間に腕時計の盗難にあった。携帯やパソコン、一眼レフなどの貴重品は盗まれないように注意していたが、腕時計は完全にノーマークだった。

☑文化・宗教上の注意　Cultural and religious aspects

✧（タイ）　同期のインターン生が交通事故にあい入院した。人口当たりの交通事故数は世界でもトップレベルで、信号はあってもないようなものだった。

✧（インドネシア）　道路を渡る際には手で車をとめる合図をして道路を渡るが、一車線を渡りきったところで中央線からはみ出し右側から走行してきたバイクに轢かれそうになった。日本では起きないため、逆走車やバイクを想定していなかった。

✧（ネパール）　外国人が入ったことのない部族のコミュニティに調査に行った時、「お金をくれるのか？」と過度な期待を持たれた。通訳に「大学院生が勉強のために話を聞きに来ただけで、お金は持ってない。」と説明してもらったが、理解してもらえず、そのコミュニティを去らざるを得なかった。コミュニティに馴染むため、現地女性と同じ服を着たり、金目のものは持たないようにしていたが、日本人＝お金を持っている、というイメージは簡単に覆せるものではなく、外国の見知らぬ土地で調査を行うことの難しさを実感した。

2018年度活動報告

4月9日	G.ecbo Day (募集説明会)	10月29日	海外インターンシップ・遡上教育型インターンシップ公募締切り
4月17日	海外インターンシップ公募締切り	11月6–7日	選考面接
4月24,26日	選考面接	11月13, 21日	帰国報告会（1）（2）
5月7日	合同留学体験報告会（発表者：池野 康太さん）	11月27, 30日	冬期）第1回事前英語プレゼンテーション研修
5月22日	合格者向け英語プレゼンテーションガイダンス	12月13日	帰国報告会（3）
5月28 – 31日	夏期）第1回事前英語プレゼンテーション研修	12月17日	海外渡航リスク管理セミナー
6月25日	海外渡航リスク管理セミナー	12月18日	冬期）第2回事前英語プレゼンテーション研修
7月2,3,5日	夏期）第2回事前英語プレゼンテーション研修	1月5日	遡上教育型プログラム派遣生インターンシップ開始
7月30–31日	夏期）第3回事前英語プレゼンテーション研修	1月15日	冬期）第3回事前英語プレゼンテーション研修
8月中旬	夏期派遣生インターンシップ開始	1月19日	冬期派遣生インターンシップ開始
9月26日	平成30年度第1回G.ecboプログラム運営委員会	1月22– 31日	帰国報告会（2）（3）
10月19日	サタケ基金助成金決定通知書授与式	2月19日	サタケ基金助成金成果報告会
		3月22日	平成30年度第2回G.ecboプログラム運営委員会

2019年度G.ecbo海外インターンシップの募集は4月から開始します！
派遣先等の詳細はHPでご覧ください。

G.ecbo will call for 2019 participation in April! Go to our website for the list of intern locations and further details.

事務局編集後記　本年度は春に11名、秋には5名の学生が選考されました。例年より多くの学生を派遣することとなったため、夏以降は絶え間なく誰かが出発し帰国していたような気がしています。来年度は運営委員の改選期であり、また10年もの間、運営委員長を務められた肥後教授も委員長を退任されます。さらに、大学院再編も予定されており、G.ecboも変革の時を迎えますが、教育プログラムとしての特色を継承しつつ、今後も多くの学生に経験や成長の場を提供していけるよう尽力していきたいと思います。さて、本号のOBコーナーでは2011年度のG.ecbo生に寄稿いただきました。7年が経過しても色あせない経験談に触れ、当時の2人を懐かしく思い出しながらまとめました。その他、就活体験談、現役学生達のホカホカの帰国レポート等も抜粋してお届けします。

広島大学 学生プラザ
グローバルキャリアデザインセンター内
G.ecboプログラム事務局

Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo